

はじめに

今年度の日本史サマーセミナーは、8月18日（土）・19日（日）・20日（月）の日程で鎌倉学園中学校・高等学校をおかりして実施した。本セミナーでは各地で関連企画・イベントが開催された明治150年に焦点をあて、「明治150年をどう教えるか」をテーマに設定した。さらに、各日では具体的に“女性から見る近現代”（1日目）、「明治維新150年」（2日目）、「沖縄と東アジア」（3日目）をテーマに設定した。授業後の研究討議では、同年3月に告示された次期学習指導要領の中で新設される「歴史総合」を見据え、「日本近現代史をどう教えるか」について活発な意見交換がなされた。

1 8月18日“女性から見る近現代史”の授業・討議内容について

まず、山川菊栄記念会の樋浦敬子先生から「山川菊栄の思想と行動」の授業があった。長年にわたり山川を研究される樋浦先生による彼女の生涯（戦前：55年、戦後35年）を通した近現代史の授業実践であった。大きくは3点、1点目は戦前の女性がおかれていた社会状況、2点目は社会主義立場のフェミニストであった山川の思想、3点目は初代労働省婦人少年局長としての山川の活動についてである。山川の思想的特徴は、女性の労働権と生活権を剥奪する元凶として資本主義の階級的搾取体制を鋭く追及しつつ、階級闘争を唱える社会主義者たちに蔓延するすべてを階級闘争に還元し性差別を不問に付す動向に対し、彼らの男性優位主義を厳しく批判する点にある。授業実践では、山川をめぐる婦人論争と「婦人の特殊要求について」（1925）からこの点を浮き彫りにした。また、統計と実態調査、各県室長の女性起用、年少労働対策、労働組合・寄宿舎の自治の活性化など当時のリーフレットなど多くの図像資料から戦後の労働省婦人少年局長としての山川の活動を生徒とともに再現した。

続いて、日本女子大学教授の成田龍一先生から『主婦論争』を知っていますか—高度経済成長のなかの女性と家族—の授業があった。日本近現代史、都市社会史を専門とされる成田先生からは、授業冒頭、石垣綾子「主婦という第二職業論」（1955）を取り上げ、1950年代になぜ、主婦＝家事労働が論争となったのかという大きな問いから、高度経済成長を女性史の視点から捉えなおす授業実践がなされた。大きくは3点、1点目に高度経済成長の特質と経済成長を生み出した要因の分析、2点目に再度経済成長を生み出した背景として労働力に焦点化し、3点目に家族のかたちについて高度経済成長にともなって家族や女性の生活にどのような変化をもたらされたのかを生徒とともに、統計資料、図像資料を用いながら読み取っていった。結果として、高度経済成長を生み出した要因として、長時間労働（男性）の実態とそれを可能にした主婦労働の実態について生徒とともに読み取っていった。通史のジャンルとしての女性史ではなく、通史を女性史という視点から捉えなおす授業実践であった。

最後に、信州大学教授の大串潤児先生からは「村の学校と“女の子”たち—近代の学校教育を視る眼—」の授業があった。長野県をフィールドにした戦前戦後の研究を進められる大串先生だからこそ見えてくる実地にもとづいた授業実践であった。授業冒頭、「長野県（信州）を教育県（国）」として評価する現代の新聞記事は事実なのかという問いから、近世から明治期にかけての教育をめぐる文字史料・統計資料等を生徒とともに読み取っていった。結果としては、学校令制定（1886）から日露戦争（1904）頃まで女子の未就学が突出して高く、また日露戦争（1904）後から1920年代まで依然として女子の中退率が高い実態を読み取った。また、女子がおかれていた状況から当時の日本の状況を読み取らせた。あえて女性史から嚆矢せず、史料の講読から社会通念までも根拠を確かめさせ生徒に

揺さぶりを与え、その必然の中で女子教育が扱われるように設定された授業実践であった。

2 8月19日“明治維新150年”の授業・討議内容について

最初は、瀬谷高校の石間健豊先生による「神々の明治維新」の授業で始まった。“神仏分離の廃仏毀釈が歴史に与えた影響は何か？”をテーマに、“神社とお寺の違いって何？”という問いから始まった。授業で題材は、安丸良夫氏の研究（『神々の明治維新』岩波書店、1979）である。まず、新政府が中央集権国家を築くために、天皇の神格的絶対性を強調する神道国教化政策によって国民を支配する正当性を打ち出したことを確認した。しかし、国家による復古神道的な政策は有効的ではなかったとする。廃仏毀釈という困難に直面した僧侶島地黙雷のキリスト教に対する危機感が、神祇官の廃止＝教部省の設置につながったこと、さらに政教分離と信教の自由へと主張を広げる中で、明治政府も宗教と神道を分ける神道非宗教論へ舵を切ったことを確認した。最後に、「神仏分離や廃仏毀釈が日本人の宗教観にどのような影響を与えたのか」という問いに答えながら授業をまとめた。

次に、一橋大学の石居人也先生から「地域から考える自由民権運動—神奈川県を起点として—」の授業があった。明治維新と自由民権運動について、当時の「自由」の意味に触れ、政府の主導権を窺う板垣ら旧士族のほか、“村のために”活動する豪農、さらに都市下層民や女性など、運動の担い手には様々な立場があったことを確認した。民権運動と神奈川県の関わりでは、運動の底流にあった豪農の危機感は、開港場横浜をかかえ、旧幕府領・旗本領だった地域性によるもので、地域のリーダーとして結社の設立や地方議会の経験をした彼らが明治期の中間層の役割にあったとする。こうした素地が国会建設建白や自由党との結びつき、激化事件への関与に展開していく。また、困民党事件を通して、富裕層の民権家と貧困層の困民党との間で、民権運動のあり方や論理など価値観の相克があったことを確認し、支配層・被支配層の二項対立図式には不全性があり、困民党と民権家のすれ違いは民衆の中の断絶で、近代や民主主義を考える上で示唆的だとする。最後に“自由民権運動とは”に対し、政治的主体としての地域リーダー、「自由民権運動＝民主主義の原点」に対する疑義、ネガティブな要素も含め「民主主義」を映しだす鏡など、民権運動の新たな見取図を提示する授業だった。

午後は徳川記念財団の岩立将史先生による「近現代における明治維新の評価を考える—赤報隊像の変遷を題材に一」の授業があった。赤報隊は戊辰戦争で新政府側の先鋒隊だったが、偽官軍として隊長相楽総三ら8名の幹部が処刑された。授業では、明治維新の殉難者でもある赤報隊の慰霊と顕彰の活動に対し、明治100年に至る長い時間軸の中で地域社会や国家がどのように向き合ったのか、明治維新に対する評価を考察した。明治前期には長野県下諏訪で、元隊士らが赤報隊幹部の墓標建立や招魂祭（相良祭）を行うが、靖国神社への合祀は実現しなかった。明治50年前後の大正時代には、全国で戊辰戦争の慰霊祭が活発化し、赤報隊も相良ら幹部の子孫による贈位請願や相良祭が復活するなど地域社会で盛り上がりを見せた。昭和天皇即位と明治60年にあたる昭和3年には、念願だった相良らへの贈位が決定し、翌年靖国神社にも合祀された。太平洋戦争期には勤皇精神を振起させるために赤報隊の顕彰運動も盛んになり、明治100年の昭和43年には、長野県神社庁で明治百年記念祝典と相良の慰霊が行われた。同年、相良百年祭も行われるなど、顕彰運動が次第に国策の動員や地域社会の結束に展開する中で、国家と地域社会の相乗利用・相乗効果をもたらしたことを確認した。

午後の討議では、コーディネーターとして明治大学の大江洋代先生に2日目のテーマ“明治維新150年”の3つの授業から論点を絞っていただき、「歴史総合を教える×今日の3つの論点」と題して議論を進行していただいた。また、コメンテーターとして関東学院大学の酒井晃先生にも参加していただいた。明治維新の終期はいつなのかという問いを出していただき、最も支持を得たのが“大日本帝国

憲法制定”で次に“西南戦争”であった。このようなことも踏まえ、歴史は①一筆書きではない、②単純化しない、③変化するもの、と歴史総合で歴史を学ぶ意味を共有する時間となった。また、明治100年とどう向き合うのか、近代化の問題はきちんと検証されたのかなど活発な議論もなされた。

3 8月20日

秦野曾屋高校 桐生 海正

日本史サマーセミナー3日目(2018年8月20日)は、午前中に長島一浩氏(瀬谷高校)「高校日本史の沖縄戦後史」、後田多敦氏(神奈川大学)「明治維新と琉球王国—2つの王権の相克—」が一般の生徒を含めた参加者(教員)に向けて行われ、午後は、川満昭広氏(なんよう文庫)「沖縄戦を学ぶこと」と題して講演が行われた。以下、当日の報告の概要と、それに対する筆者の所感を述べてみたい。

長島氏は、高等学校で行う授業実践形式で報告を行った。ワークシートでは、「知ってほしい 沖縄『3つの常識』」と題し、「その1 日本ではない沖縄」、「その2 戦場となった沖縄」、「その3 今なお『戦場』である沖縄である」の3項目を取り上げた。「その1」では、琉球王国は、日本や中国の支配をうけたものの、独立王国の形をとっていた。ところが、「琉球処分」により、日本へ組み入れられ、沖縄は近代日本の最初の「植民地」となったとする。「その2」では、本土防衛のための「捨て石」作戦が実施された沖縄戦で、住民を巻き込んだ大規模で激しい地上戦が繰り広げられ、「住民虐殺」や「集団死」の事件が頻発したとする。「その3」では、沖縄には今なお在日米軍基地・施設が大多数集中しており、産業発達への障害のほか、騒音被害や軍人犯罪の多発など現在でも人々の生活を脅かす問題となっているとまとめた。午後の全体討論の場では、特に沖縄戦後史に特化した形で、沖縄戦から現代にいたるまでの沖縄の歩みが示された。沖縄の戦後史を概括的に把握できるとともに、「コザ反米騒動」などの詳細な資料を提示されたため、非常に多くの教材化の視点を得ることができた。

後田多氏は、明治政府による琉球国(史料上、「琉球王国」とは出てこないという)併合問題を取りあげ、日本の近代国家樹立過程における国境画定事業の一つという認識に再検討を迫った。国家の「主権」に着目し、琉球国が幕末にアメリカと和親条約を結んだ事例などを紹介しつつ、2つの王権(明治天皇と琉球国中山王)の相克を追った。そして、日本の最初の植民地が琉球であったと指摘された。

川満氏は、沖縄戦に関する絵画や戦跡、戦没者数のグラフなど多角的な視点で沖縄戦に迫る講演であった。特に印象に残っているのは「軍隊は住民を守らない」という言葉があるが、これを実感させるためにはどう伝えればよいかボランティアガイドをしながら長年考えている、と指摘されたことであった。この他にもゲリラ戦となった時に北部の山で住民が食べたもの(バッタ、カタツムリなど)や軍の病院から発掘されている遺物など、授業でも活用できる話も織り交ぜられていた。

最後に今回のセミナーに参加しての所感を述べてみたい。このセミナーでは、現役の教員と外部機関との連携により、一つのテーマを掘り下げていき、現場に還元するスタイルをとっている。その点で、従来あまり詳しくなかった沖縄戦後史の歩みや、琉球処分の過程、沖縄戦の実態など日頃の授業で取り入れたい視点を多く学ぶことが出来た。一方、最新の研究動向が盛り込まれていたため、議論の余地を残す部分があったと感じた。一つだけ大きな論点を指摘しておきたい。それは、琉球国は日本の最初の植民地なのか(と教えても良いか)という点である。長島氏、後田多氏ともにその点を主張しておられたが、私はまだそれは研究段階の議論であり、高校の現場で教えることには抵抗感を覚えざるを得なかった。そもそも琉球処分の前提には、近世の徳川幕府と琉球との関係性の解明が不可欠であるが、その点に関しては主に「琉球処分」という局面を切り取られて話がなされ、言及が不十分であったと感じた。例えば、琉球は薩摩藩の石高に組み入れられていたが、それはどのように考えれば

良いのだろうか。琉球は薩摩藩の「附庸」であるという史料上の表現はどのような状態を指すのだろうか。理解をお聞きしたかった。とはいえ、今回の研修では、改めて現代まで続く問題として「沖縄からは東京は見えるが、東京からは沖縄は見えない」という言葉の意味を再思三考する機会となった。

《サマーセミナーの様子》

